

氏名(本籍)	いし だ き み (東京都) 石 田 喜 美 (東京都)		
学位の種類	博 士 (教育学)		
学位記番号	博 甲 第 4723 号		
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	「ピア・グループ」によるメディア・リテラシー学習の支援に関する研究		

主査	筑波大学教授	博士(教育学)	塚田泰彦
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	田中統治
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	平山満義
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	茂呂雄二

## 論文の内容の要旨

### 1. 目的

本研究は、社会構成主義の立場から、近年のメディア・リテラシー教育が前提としてきた学習者モデルの問題点を解明し、その代案となるモデルを構築した上で、新たなメディア・リテラシー教育を開拓するための「メディア・リテラシー学習環境のデザイン」を提案することを目的としている。これまでのメディア・リテラシー教育は、「教科教育としてのメディア・リテラシー教育」と「学校外教育活動としてのメディア・リテラシー教育」とにおいて相反する学習者モデルに基づいて理論や実践が展開されてきている。このために、メディア・リテラシー教育は事態としては二極化しており、この事態の改善のために、それぞれを特徴づける「社会・文化を受容する学習者」と「社会・文化を創造する学習者」という二つの側面を視野においた新たな学習者モデルとして「『現実』を構成する学習者」というモデルを本研究は構想し、このモデルの構築とその社会文化的文脈での構成状況を実証的に捉えることを目的としている。

### 2. 対象と方法

三つの研究課題（これまでのメディア・リテラシー教育の前提の相対化、自然発生的な学習環境のモデル化、学習環境モデルの教育学的意義の確認）を設定し、三部構成で研究を進めている。第一部では、問題の所在を明らかにし、社会構成主義の立場からの理論的な検討によって「メディア・リテラシー教育で生成されるべき学習環境デザイン」を議論し、メディア・リテラシー教育の目標を実践的倫理知の生成と規定している。第二部では、本研究が依拠する方法論としての社会構成主義について確認し、この立場からメディア・リテラシー教育を追求するための方法について検討している。また、これを受けて、メディア・リテラシー学習が自然発生的に生じている場の質的な調査研究を行って、学習環境のモデル化を行っている。第三部では、「ピア・グループ」というモデルに基づいた学習環境デザインを教育場面において実践し、そこで生じる学習現象を記述して、「ピア・グループ」という学習環境デザインの教育学的意義を確認している。

### 3. 結果

本研究の成果は次のとおりである。1) これまでのメディア・リテラシー教育の問題点として、教科教育を中心とする「社会・文化を受容する学習者」が様々なレベルやカテゴリーで国家やメディア産業などの権

力主体からの影響を一方的に受けることを前提としている点を批判し、この問題の改善のために、学校外教育を中心とする「社会・文化を創造する学習者」のもっている学習者自身による自らの文化創造や関係構築の側面を優位に位置づけてその学習者モデルの再構築を行った。2) これまでのメディア・リテラシー教育が体系化された内容の概念的理解に傾きがちであった問題点を解決するために、インフォーマルな性質を持つ実践的倫理知の生成を支援するメディア・リテラシー教育を実現する学習環境デザインのモデルを構成した。3) 三つのフィールドワークによる質的な調査研究を実施して「ピア・グループ」という学習環境デザインの有効性を実証した。

#### 4. 考察

本研究は、二極化しているメディア・リテラシー教育の現状を、学校教育の内と外という枠組みで捉えなおし、学習者主体の成立のために必要な教育的枠組みを再考した。このことによって、新たな学習者モデルの構成に必要な教育目標として「実践的倫理知の生成」を定位してその教育実践上の必要性を明確にした。また、この新たに位置づけされた「『現実』を構成する学習者」の実相とその教育学的意義を明らかにする次の四つの視点を実証した。1) メディア・ファン・コミュニティの機能と構造、2) 「ピア・グループ」に基づく学習環境デザインの意味生成の支援、3) 「ピア・グループ」が読者の受動的側面と生産的側面を媒介する役割、4) 「ピア・グループ」モデルに基づく学習環境デザインの具体的機能と限界。以上の理論的・実証的研究を通して、メディア・リテラシー教育の学習環境デザインを構成するための視点として学習者自身の人間関係という視点の重要性を提起したことは、教育研究に大きな意義をもつものと判断できる。

### 審査の結果の要旨

メディア・リテラシー教育の理論と実践史を再考し、その展開としての現在の課題を的確に位置づけるとともに、社会構成主義の立場から新たな学習者モデルを構築して、これからのメディア・リテラシー学習の支援について実証的な知見を提示し得たことは高く評価できる。特に、メディア・リテラシー教育研究の枠組みを社会・文化的文脈で再構成するために、実践的倫理知を目標とする「学習環境デザイン」の具体的な機能と限界を継続的なフィールド・ワークによって明らかにしたことは、注目すべき成果である。本研究によって、「ピア・グループ」による学習者の既存の社会・文化とのかかわりにおける自らの意味生成とその個性的な展開が新たな精度で理論的にも実証的にも深く追究された。メディア・リテラシー教育における学習者の受動的側面と生産的側面の関係のモデル化や実践的倫理知の生成についての評価などは今後の課題である。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。